CITY WATCHING

いきいきまえばし人

森のhahako園代表
阿部 玲奈さん・39歳
粕川町深津

共有するともっと楽しい

子育てサークル「森のhahako園」。サンデンフォレストを拠点に、自然を舞台に子育てをしたいという思いを持った母親たちが集まる。

「代表者と言っても私もあくまで参加者の一人。みんな対等に心を開ける関係です」

結婚を機に、5年前に東京から前橋へ越してきた。現在、4人の子どもを育てている。

「未就学児はどこで遊ぶのか、何を食べるのか、決めるのは全て親です。東京から来た私には、市街地から大自然に車ですぐ行けることや、祖父母世代から手作りの伝統料理が引き継がれる前橋の風土が魅力的に映りました」

「このような環境で子育てしたいという親は多いはず」と幼稚園の仲間を誘って始めた子育てサークル。今では全市域から賛同者が参加する。

「みそづくりや草木染めなど、季節ごとの企画もあります。どんなことでも、みんなで共有したほうが楽しいです」

目指すのは、みんなでみんなの子どもを育てる暮らし。このサークルだけでなく、昔の道具を使って食物を育てる「はたけdeおやこ園」など活動の幅も広がっている。「母親にとって心地の良いことは、子どもにも良い」と昔からの暮らしの知恵を、地域の人との連携で現代につないでいる。

萩原朔美 河畔奇譚

vol.2

圓前橋文学館
☎027-235-8011

萩原朔美文学館長が各界の著名人と対談。さまざまな領域で活躍する館長の素顔に迫ります。前回に続き、ゲストは雑誌「ビックリハウス」刊行時代を共にしたクリエーティブディレクター・榎本了壱さんです。

●カウンターカルチャーからサブカルチャー、そして今を生きる若者へ

榎本（以下E） 私たちは60年代末期の世代。文化といえばカウンターカルチャー。寺山修司さんのところでも、既成概念をどこかで否定するのが当たり前。ビックリハウスを始めた頃も心根はカウンターカルチャーだった。でも、時代が変わり始めていて、それにうまく乗れて、サブカルチャーのきっかけを作れた。

萩原（以下H） 僕らも明らかに雑誌を利用して雑誌とは何かを問うという姿勢はあった。今の学生も雑誌をやりたいというけど、それはどこの出版社に入れるかということ。一から雑誌を作ろうという考えが全くない。そうやって保守化しているのは本当に問題。

E 現状にさほど不満がないときというのは、新しいものが出難いときなのかもね。特にラジカルなことは。

H でも、若者は今も貧乏だから、何かあるかもよ。

E 当時われわれがやっていたことは、言葉とビジュアルとの掛け合わせ。その面白さはあったと思う。

（9月15日号へ続く）

クローズアップ CLOSE UP

前橋の新たな価値誕生

6月25日、中央通り商店街で「前橋めぶくフェス」を開催しました。前橋の新鮮野菜や本市ゆかりの作家・アーティストの作品などが並び、一日限りのイベントを実施。商店街は多くの人の笑顔であふれ、前橋の新たな芽吹きを感じられた一日になりました。

健康長寿のまちを語る

7月1日、昌賢学園まえばしホールで健康医療講演会を開催。これは群馬医療福祉大と本市の包括連携協定に基づき実施したもの。健康長寿のまちづくりをテーマに恩賜財団済生会の炭谷理事長が講演を行い、市内のオピニオンリーダーが意見を交換しました。

故郷でのロケ作品上映

けやきウォーク前橋内ユナイテッド・シネマ前橋（文京町二丁目）で、6月24日に本市出身の清水崇監督作品を含むオムニバス映画「ブルーハーツが聴こえる」公開初日舞台あいさつを開催。監督は「初の地元ロケ作品を楽しんでほしいです」と語りました。